高知県立
文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
Vol. 61

▲「県庁おもてなし課」イメージイラスト©大矢正和

リレー随筆

「有川浩のセカイとコトバ展」に向けて

大矢 正和

「有川浩のセカイとコトバ展」開催おめでとうございます。

新聞小説の挿絵を描いてみないか？と、わたしのところに依頼があったのは平成21年の春。かれこれもう4年前。それが「県庁おもてなし課」でした。

高知出身の作家が高知を舞台にした小説を高知新聞で連載するという。連載開始前から地元に密着した様々な企画も進行していて、たとえば高知を舞台にした短編小説大賞、応募資格は高知在住もしくは出身の学生、審査員には有川浩氏本人が入っているというものもありました。まさに高知尽くし。

最初に頭をよぎったのは……わたし、東京生まれだけど大丈夫？

地方紙はその地域に根付いているというのが大きな特徴。これだけ高知に密着した内容にかかわらず、他県の地方紙でもつぎつぎと連載が決まっていき本当に驚きました。最近では単行本ですらポスターを作ることは少なくなっているのにポスターを作った新聞社まであります。他にも高知の子どもたちや学生の手により連載前に大きな爪楊枝画が、連載終了後には20メートルにも及ぶ巨大モザイク画が制作されました。ちょっとしたお祭り騒ぎです。

毎日一枚、水彩画を描き上げるというのは正直しんどいものがありましたが、参加することができてよかった。貴重な経験ができました。

地域を舞台に物語が展開するドラマや小説はたくさんあります。でも実際に行ってみたいと思えるものは意外に少ない。多分、地域（素材）をよく知らない人が作っているケースが多いからだと思います。「県庁おもてなし課」は素材をよく知った上で料理しているだけあって、実においしそう。

小説を読み、高知を訪れる人が増えていると聞きます。かくいうわたしもその一人。プライベートで家族や親戚を連れ高知旅行へ行きました。

細く手すりもない沈下橋を車で普通に走る地元の人の姿には驚嘆。地元の人にとっては観光地でなく生活路だから当たり前といえば当たり前なのかもしれませんが、わたしだったら車どころか自転車でもこわくて無理。また、劇中「日本三大がっかり名所」と紹介されたはりまや橋のがっかりっぷりの見事さときたら、四万十川や仁淀川とは違った意味で必見です。

今回、挿絵の原画も展示していただけるとのこと。普段なかなか原画を見てもらえる機会がないのでわたしも楽しみにしています。（イラストレーター）

展覧会紹介 Exhibition

有川浩のセカイとコトバ展

高知初 恋する文学展

平成25年
4月20日(土)
▼
7月15日(月・祝)
企画展示室
観覧料500円

高知県出身の作家・有川浩さんの作品は、『図書館戦争』シリーズでの星雲賞や『植物図鑑』『キケン』『県庁おもてなし課』と3年連続で小説部門のブクログ大賞の受賞など、高い評価を得ています。また、出版物の形態にとどまらず、映像の面でも注目を浴びており、相次ぐ映画化・ドラマ化を果たしています。

高知県立文学館では、今春公開となる「県庁おもてなし課」「図書館戦争」の映画化を記念して、今、最も熱く、注目度抜群の有川さんの生み出す作品のセカイと、読者の心を魅了するコトバを中心に紹介する企画展を開催します。

▲『図書館戦争』有川浩／角川書店刊

展示構成

1 有川浩のセカイ

小説からアニメ・映画・舞台へと広がる有川浩さんのセカイ。ここでは、デビューから現在までの作品の全体概要を紹介します。深化、変化、クロスオーバーする変幻自在な有川さんのセカイを一望いただきます。

2 有川浩のコトバ

自衛隊シリーズや『図書館戦争』シリーズなど、有川作品をグループ分けして、その魅力と多彩な展開を紹介します。また、有川浩さんが生み出すセカイの中にあふれる、読者の胸をときめかせる「有川が紡ぐコトバの魅力」を探ります。

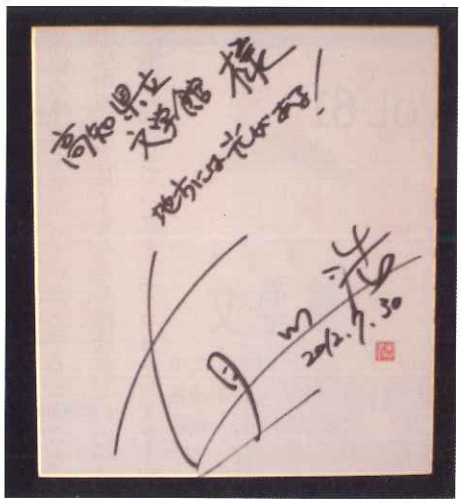
有川さんは作品の中で地域が抱える問題や近年発生した震災について、作家として自らができることを問うと同時に、その想いを作品の中に織り込んでいます。そうした想いは、メッセージ性の高い作品として、ファンをはじめとする多くの読者の共感を得ています。また、有川さんの作品の中にも登場し、高い人気を誇るブルーインパルス関連の模型やワッペンなども展示します。

あわせて、サイドストーリー、アフターストーリーという有川流の読者へのサービス精神と、その手法の楽しさにも迫ります。

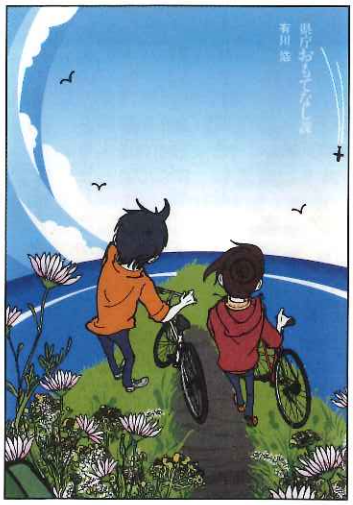
3 ふるさとへの思い『県庁おもてなし課』のセカイ ～地方には光がある― 物語が元気にする、町、人、恋。～

ふるさと(地方)にエールを送る有川浩さんの熱い思いをのせた史上初、恋する観光小説『県庁おもてなし課』(5月11日より映画公開)のセカイを紹介します。新聞連載時に挿絵を手がけたイラストレーター・大矢正和氏の原画をはじめ、文学館で作成したオリジナルマップや、小説の名場面を飾る高知のビューポイントなど写真もあわせて紹介します。

高知の魅力を作品を通して全国に発信し続ける有川さんの、〝プチナショナリスト〟としての側面も感じていただければと思います。



▶有川浩色紙「地方には光がある!」(2012年7月30日)



◀『県庁おもてなし課』有川浩／角川書店刊

会覧展紹介 Exhibition

有川浩のセカイとコトバ展

高知初 恋する文学展

平成25年
4月20日(土)
▼
7月15日(月・祝)
企画展示室
観覧料500円

☆展示解説
展覧会担当者による展示解説を行います。
毎週土曜日
各日とも午後1時半～(約30分)
参加には当日観覧券が必要です。
直接会場にお越しください。

4 有川浩と有川作品を調査&解体 愛×絆

有川浩さんの作品とその魅力を、もっともっと面白く読むためのポイントを様々な角度からご紹介します。

○作品を飾るイラストのセカイ

『三匹のおっさん』シリーズの挿画等を担当した須藤真澄氏や『植物図鑑』のカバーイラストを手がけたカスヤナガト氏の原画等をご覧いただけます。

○文学館オリジナルランキング

県内の書店での有川浩さんの作品の売れ筋ランキングなどを紹介します。

その他、作家・有川さんに影響を与えた作家や作品の紹介にもご注目いただければと思います。

☆また、2階ロビーでは「県庁おもてなし課」の映画のコーナーも登場します。高知ロケが行われるなど、高知の"あったか"な魅力が再発見できる映画「県庁おもてなし課」のセカイも、ぜひお楽しみください。

(学芸課／野々村昭美)

有川浩のセカイとコトバ展 ARIKAWA HIRO

高知初 恋する文学展

関連企画

■イラストレーター・大矢正和氏ワークショップ

『県庁おもてなし課』の挿絵を手がけた大矢正和氏を講師に迎えて、色に関するお話と彩色体験をお楽しみいただけます。

日　時：5月5日(日)・6日(月・祝)午後1時～4時
場　所：文学館1階ホール
参加費：当日観覧券をご購入の上、ご参加ください。
定　員：40名(お電話、または文学館受付にてお申し込みください)

©大矢正和

■文学散歩「『植物図鑑』を味わう」

日　時：4月24日(水)／6月9日(日)／7月7日(日)　※各日9時～5時　詳細はお問い合わせください。
行き先：文学館、高知県庁(映画「県庁おもてなし課」ロケセット)、牧野植物園
参加費：3,900円(予定、特別メニューの昼食・ティータイム付)
定　員：20名(お電話、または文学館受付にてお申し込みください)

■トーク「有川作品の魅力の周辺」

有川作品の魅力を元吉喜志男(高知県立文学館館長)が紹介します。このイベントは文学カレッジの一環として開催します。

日　時：4月27日(土)午後2時～3時30分　　場　所：文学館1階ホール
参加費：無料　　定　員：100名(お電話、または文学館受付にてお申し込みください)

■木洩れ日コンサート

企画展イメージに合わせて、NPO法人こうち音の文化振興会の皆さんによる演奏をお楽しみいただけます。

日　時：5月3日(金・祝)午後1時～(40分程度)
場　所：文学館前・藤並の森(雨天時は文学館ホール)
参加費：無料(お申し込みも不要です。直接会場にお越しください)

©大矢正和

■文学散歩「映画「県庁おもてなし課」鑑賞付き」

日　時：5月14日(火)／6月1日(土)／7月1日(月)　※時間等は調整中です。詳細はお問い合わせください。
行き先：文学館、高知県庁(映画「県庁おもてなし課」ロケセット)、TOHOシネマズ高知
参加費：2,000円(予定、映画チケット代含む)
定　員：20名(お電話、または文学館受付にてお申し込みください)

■朗読の会「有川浩の著作を読む(仮)」

日　時：5月18日(土)午後2時～4時
場　所：文学館1階ホール
参加費：無料(お申し込みも不要です。直接会場にお越しください)

文学 Media Art展
紀貫之からライトノベルまで

好評のうちに閉幕しました！展覧会のレポートをお届けします！

文学とメディアアートを融合した異色の企画展「文学×Media Art展」が、4月7日で終了となりました。本展は、企画展「文学の触覚」（東京都写真美術館／平成19年12月15日－平成20年2月17日）を下敷きとして再構成したオリジナル企画で、文学館では全国的に初の試みでした。

今回は文字だけではなく、音や香りなど、五感を通して文学の世界を感じて頂きました。お客様には、見慣れた作家の作品も、普段と違うものに感じられたのではないかと思います。

今回の展覧会で特徴的だったのは、普段は館に来ないような若い方に大勢来て頂いたこと、また、作品を前にお客様から歓声が上がり、見知らぬ人同士で作品の楽しさを共有して頂けたことです。黙読による個人的な楽しみだけではなく、より開かれた読書体験を提供できたのではないかと思います。

関連企画では、作家によるギャラリートークや、iPad（アイパッド）を使って新しい読書の形を体験するワークショップ「触れて読む文章」、スノードームやしおりを作る工作イベント、国際デザイン・ビューティカレッジの学生さんとコラボした朗読の会「なごりの花」などを開催しました。どのイベントも、老若男女問わず楽しんで頂きました。

文学の面白さをいかに伝えるか、というのは、どの文学館でも抱えている課題ですが、今回の試みを通じて、新しい展示の可能性がいろいろと見えてきたようにも思います。

（学芸課／永橋禎子）

▲作家によるギャラリートーク

▲ワークショップ「触れて読む文章」の様子

学芸員メモ

この度、高知県立文学館に勤めることになりました、谷岡真衣です。三月まで県立高校で国語の教員をしていました。学生時代は宮沢賢治を中心とした明治、大正期の児童文学について研究しておりました。故郷を理想郷に見立て、岩手の自然の中から美しい童話を紡ぎだした宮沢賢治の感性にしばしば心を打たれたものですが、この度、文学館に配属になり、はたして私は自分の故郷である高知県の育んだ文学にどれほど関心を持ってきたのだろうと改めて自問しています。多くの幕末の志士を輩出したという事実以外に、高知県の雄大な海や豊かな山、森や川、太陽が私たちに与えてくれた文学的土壌の中から生まれた業績を知らないのはもったいないことです。高知県立文学館では郷土出身作家についての展示や多くの企画展、イベントがあり、高知の文学、文化の発信地として県民の皆様と共に文化振興に取り組んでいます。

教育現場での歳月を重ねるごとに、「鑑賞」と「読解」の狭間で悩むことが大いにありました。テキストを正確に「読解」する力、また作品を感じる「鑑賞」の力、どちらも「国語力」といわれるものです。ある単元が終わると生徒から「初めて読んだ時は意味がわからなかったけれど、授業したらどういう内容かわかった」と言われたことがあり、読む力なくして感じる事は難しいのだと感じていました。

高知県の郷土の育んだ美しいことば、新しい文学と皆様の素晴らしい出会いの場となれるよう、高知県立文学館の一員として精進したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（学芸課／谷岡真衣）

土佐文学さんぽ 60

戦前の土佐の光景 ―小川正子「小島の春」―

猪野 睦

いまでは忘れられているが、小川正子の「小島の春」がベストセラーとなり版を重ねたのは昭和15年だった。70年あまり前である。「小島の春」は瀬戸内海のハンセン氏病療養所 長島愛生園の女医小川正子が、患者検診行で来高、高知県下を丹念に歩いた記録だった。それに短歌も混えた流麗な筆致が読者をひきつけた。昭和10年前後のまだ未開発の高知の地理、風俗、風景、暮しを浮かびあがらせていた。

昭和9年にはまだ土讃線は池田までしかついていなかった。小川正子は池田から大杉まで、大歩危小歩危の急流に沿う難路を省線のバスで通った。鉄道省運行の小バスである。高知から須崎までの汽車は超時代的な客車に2輌貨車を連結したものだった。その須崎が終点だった。

▼かつての久礼坂

昭和11年にもくるが、そのときは高知まで開通していた。駅々では日の丸と万歳の見送り光景をみる。朝倉四十四連隊への入隊見送りであり、沿線の平野の家々には日の丸がたち、それが出征兵士をだした家とわかる。日中戦争前夜の徴兵光景だった。

須崎から奥地へゆくと患者を見かける。葉山から東津野へは当時、難所といわれた辞職峠の曲りに曲った道を眼下にみながら雲の中の中へ入っていくこともあった。前には鳥形山がそびえたっていた。須崎から窪川へは有名な久礼坂という危険な曲りに曲った坂を乗合バスで登った。坂の上からは久礼の海が眼下に小さくみえた。

窪川からは人力車、トラック、川舟で四万十川に沿って田野野へ着くが、そこの宿屋はまだランプを使っていた。難路行だった。

高知市では城東館に泊った。夜、部屋へ鉦の音と御詠歌がきこえてくる。巡礼が冬の夜の街を冴え冴えと鉦の音を残して消えていく哀調を、この中にも患者がいると思いながら聞く。当時の高知市人口は十万あまり、江の口川から北と下知一帯は水田が拡がっていた。鏡川河畔にも病をもつ遍路をみかける時代を描出した記録だった。

先日、開通した久礼から窪川へのバイパスを走った。谷をまたぐ高架橋とトンネル続きの直線高速路からは、谷をへだてた向いの山すそから山ひだに沿ってはい上っていく小川正子が難路とかいた久礼坂が見えかくれした。70年の年月の高知の移り変りに思いをはせらせる忘れられた一冊でもあった。

（詩人）

資料受贈報告

―最近の寄贈資料から―

大町桂月扁額「天有酒星」他 大町桂月関連資料

西内伸夫氏寄贈

▲大町桂月扁額

写真の資料は高知県出身の文人・大町桂月の書で、須崎市の西内家に伝わってきたものです。寄贈者の西内伸夫氏の祖父・西内誠喜氏は須崎町議も務めた土地の有力者で、大町桂月とも親交があったといいます。

桂月は11歳で上京して以来、38年間高知には帰ってきていませんでしたが、1918（大正7）年、1920（大正9）年の2度帰郷を果たしています。

今回ご寄贈いただいた扁額には「大正九年夏」と書かれており、1920年の2度目の帰郷の際に書かれたものだということがわかります。この時の帰郷では、田中貢太郎とともに書会や講演をしながら、西は足摺岬、東は甲浦、北は梼原・大杉など県内各地を巡遊し、名所・旧跡を丹念に見て回りました。

須崎では西内誠喜氏が大樽の滝へ案内。桂月は、この旅のことを綴った「土佐吟草」の中で「大樽の瀧、涼味を味はふに足る」と述べ、「大空に瀧を仰ぎて晝寝哉」という句を残しています。

この巡遊の旅が最後の帰郷となり、以後桂月は土佐の地を踏むことはなく、熱愛の地・青森県蔦温泉で生涯を終えました。

西内氏からは扁額の他にも大町桂月書軸や桂月を大滝の樽に案内した際に撮影した写真など、桂月に関する貴重な資料を多数ご寄贈いただきました。

（学芸課／岡本美和）

受贈報告（平成24年11月～平成25年3月）敬称略

▼**西内伸夫**・「大町桂月扁額 「天有酒星」」他 ▼**細川光洋**・「怪異考／化物の進化―寺田寅彦随筆選集 寺田寅彦著 千葉俊二・細川光洋編 中央公論新社刊」 ▼**中脇初枝**・「女の子の昔話 日本につたわるとっておきのおはなし 中脇初枝再話 偕成社刊」 ▼**河出書房新社**・「こんこんさま 中脇初枝著 河出書房新社刊」 ▼**小松弘愛**・「詩集 ヘチとコッチ 第三集・土佐の言葉 その語彙をめぐって 小松弘愛著 土曜美術社出版販売刊」他 ▼**市原麟一郎**・「新聞スクラップ帳 読売新聞連載「ぼくと私の高知空襲」市原麟一郎・文 藤本知子・絵」 ▼**食野雅子**・「マジックツリーハウス33 大統領の秘密 メアリー・ポープ・オズボーン原作 食野雅子訳 メディアファクトリー刊」 ▼**山本靖子**・「夢―藤本楠子女史追悼録― 田宮虎彦・安岡章太郎他著 里見義裕・城西館編 城西館刊」他 ▼**多賀一造**・「温め石 多賀一造著刊」 ▼**竹内功**・「夢 厦門に消ゆ 五十年祭（田村豊崇遺作集）田村恒位・島田真月編」 ▼**横田晴光**・「錦 宮尾登美子著 中央公論新社刊」他 ▼**岡野正**・「田村乙彦 その足跡と創作 岡野 正著刊」 ▼**林亮**・「林亮句集 遠国 林 亮著刊」 ▼**萩野翼**・「遺歌集 寒蟬の声 萩野つゆ子著 歌と観照社刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

文学館の常設展が変わりました！

来館の度に新しい発見があると好評の〝変わる常設展示〟。見どころをご紹介します。新しい視点で、文学の世界を旅してみませんか？

◆常設展『宮尾文学の世界』室にて、宮尾文学の魅力と映像化・舞台化

「喜和は、朝、出がけの岩伍からいいつけられていた夏物を出すために、押入れから支那カバンを引張り出したとき、あ、間もなしに楊梅（やまもも）売りの姐さんが出て来るよ、と思った。」

宮尾登美子文学の原点ともいえる『櫂』の書き出し部分です。支那カバン、楊梅、といったキーワードとともに、富田家の初夏の一日が読者を文学の世界へ誘います。

宮尾さんの文章は、音楽を奏でるかのように美しく、読んでいる人びとの心に染み入ってきます。そして、私たちは、宮尾さんによって奏でられる心地よい文章という音楽の世界へと誘われてゆくのです。

それは、まるで映画の一場面を見ているかのようでもあります。宮尾さんの文章に出会うと、一瞬にしてその情景が脳裏に浮かび、読者一人一人がそれぞれのイメージを膨らませ、文章に釘付けになります。その筆致は、決して私たちの期待を裏切りません。読者を飽きさせることなく、次のページへ、その次のページへと誘い続け、私たちは、いつの間にか最終章を迎えているのです。その表現力、構成力は、実に見事です。宮尾文学の魅力はここにあると言えるでしょう。

それを証明するかのように、多くの宮尾作品が、映像化・舞台化されています。4月からは、皆様から要望の多かった「映像化・舞台化された作品群」をご紹介します。

◆常設展『寺田寅彦記念室』等にて、『文学と天災地変』をテーマに展示

2013年春より、全国文学館協議会の主導によって、全国各地の文学館で共通のテーマによる共同展示「文学と天災地変」が同時開催されています。共同展示を開催するのは加盟館中41館で、北海道から九州まで、全国にわたります。

当館では、寺田寅彦記念室ミニ企画コーナーと常設展示室内に、それぞれ「寺田寅彦と地震」「高知ゆかりの作家と地震」というテーマで展示を行います。

また、常設展入り口「現在の作家コーナー」を組み替え、山本一力、坂東眞砂子、嶋岡晨、志水辰夫、有川浩、西澤保彦といった作家の展示を充実させました。ぜひご覧ください。

（学芸課長／津田加須子）

館長室から

館は人なり

元吉　喜志男

年度単位での仕事上、この時期はスタッフの出入りもあり、新春とは異なった意味で、感慨深い気持ちになる季節でもあります。

15周年目の平成24年度は、職員の頑張りや関係者の方々のご協力等に支えられ、開館以来最高のお客様をお迎えすることが出来ました。アンケート調査などから、その約6割は初めて来館いただいたお客様であったと推測されます。

本と関係する公的施設で、新たなお客さんが急増し注目されている所があります。昨年11月にJR甲府駅北口に新築移転した山梨県立図書館です。開館以来、2ヶ月の入館者は、それまでの一年間の数を上回り、その7～8割は、従来図書館に来ていなかった人達と言われています。この図書館の館長は、作家で日本ペンクラブ会長も務めた阿刀田高さん。山梨県と関わりが無かった阿刀田さんが館長職の要請を受けた最大の理由は、「本や読書を取り巻く状況が変界期にあり、ずーっと本を読んで、本を頼りにして来た身としては、この辺で本にご奉公しないと…」といった思いからだったといいます。

急増した利用者以上に注目したいのが、阿刀田さんの館にとって大切なもののプライオリティーの考え方です。最新鋭の設備を有した新しい綺麗な建物であっても「施設」はあくまで三番目。「本」が沢山あっても二番目。では、一番大切なものはというと、それは「人」。たとえば、子どもの読書を考える場合、子どもが好きな人で、性格をよく知っていて「この間の本も良かったけど、こっちも面白いよ」と薦められる人（館員）の存在だと…。

魅力的な館づくりへ向けて最も大切と思われるものは〝前向きの豊かな発想力と熱い思いのある人の力〟かと。

新たな年度へ向けて、館員とともに次なるステージへと思いを巡らすこの頃です。

◆常設展企画コーナーにて、安岡章太郎追悼展開催！

高知県ゆかりの文学者のメモリアルイヤーなどに着目して紹介する常設展示室企画コーナーでは、今年1月26日に92歳で逝去された安岡章太郎さんを偲び、追悼展を開催します。

安岡章太郎さんは、1920(大正9)年高知市生まれ。1951(昭和26)年31歳の時に「ガラスの靴」が「三田文学」6月号に北原武夫の激賞とともに掲載され、文壇デビュー。日常の中の人間を描く私小説的な作風で吉行淳之介や遠藤周作らとともに「第三の新人」と呼ばれました。1953(昭和28)年には「悪い仲間」「陰気な愉しみ」で第29回芥川賞を受賞。1960(昭和35)年には母の死を描いた『海辺の光景』で野間文芸賞と芸術選奨を受賞するなど、数々の文学賞を受賞しています。

少年時代の安岡さんは陸軍獣医であった父の転勤に伴い度重なる転校を経験。慶応義塾大学在学中に召集されソ連・満州国境へ派遣されるも胸部疾患を患い現役免除。戦後脊椎カリエスを患い、しばらく寝たきりの生活を送りました。安岡さんはそういった自身の体験の負の部分を誇張することなく客観化し独自の私小説世界を築き、幼少期の体験を題材にした「宿題」『花祭』、軍隊時代の体験を描いた『遁走』など、優れた作品の数々を発表しました。

また、父の一族をたどり激動の幕末を生きた人々を描いた『流離譚』や母の一族に連なる人々を追憶した『鏡川』など、高知を舞台とした作品も残しています。

追悼展では安岡さんからご寄贈いただいた直筆原稿「大世紀末サーカス」、『流離譚』の登場人物である吉村虎太郎の遺言を書した安岡さん直筆の書軸の他、全著作を一堂に展示するなど、安岡さんの歩みと作品を資料とパネルでご紹介します。

(学芸課／岡本美和)

▲桂浜にて―昭和56年／写真提供 新人物往来社

▲展示の様子

平成25年4月1日(月)～
平成26年3月末(予定)

人事異動

【転入】

新所属	旧所属	
学芸課 主幹	室戸高校	谷岡 真衣
事業課	県民文化ホール	吉川 良子

【転出】

新所属	旧所属	
須崎高校	学芸課 主幹	北添 尚子
県立美術館	事業課	都司 桜

文学館のマスコットキャラクターが決まりました！
皆さま、素敵なお名前をありがとうございました！
105通の応募の中から、“しおり”と“筆太”に決定いたしました♪

高知県立文学館ニュース　第61号　平成25年4月22日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX088-871-7857

企画展年間案内

※企画展の観覧券には常設展の観覧券も含まれています。

4月～7月　有川浩のセカイとコトバ展

4月20日(土)～7月15日(月・祝)　場所：企画展示室　観覧料：500円(常設展含)

詳細は館報の表紙・２ページ・３ページをご覧ください。

『県庁おもてなし課』／有川浩著（角川書店刊）

8月～9月　Happiness is SNOOPY™ スヌーピーの小さな幸せ探し展

8月１日(木)～9月16日(月・祝)　場所：企画展示室　観覧料：500円(常設展含)

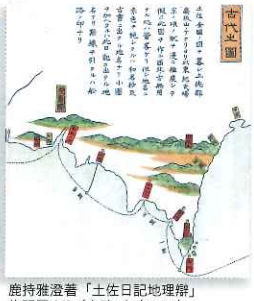
本展は、チャールズ・M・シュルツさんの「Happiness is a warm puppy」を五感で味わっていただけるようにつくりあげたものです。スヌーピーとその仲間たちが繰り広げるカラフルな絵本の森で小さな幸せをたくさん見つけてください。

PEANUTS™ by Schulz
© 2013 Peanuts Worldwide LLC

9月～11月　紀貫之と『土佐日記』展

9月28日(土)～11月24日(日)　場所：企画展示室　観覧料：400円(常設展含)

我が国最初の日記文学として知られる紀貫之の『土佐日記』は、貫之が土佐守の任を終えて京に帰る55日間の旅を綴ったものです。展覧会では、紀貫之と彼の残した『土佐日記』の世界を当館所蔵の資料を中心に紹介し、郷土の古典文学に親しんでいただきます。



鹿持雅澄著「土佐日記地理辯」旅程図より／安政4年(1857)

12月～平成26年1月　近代文学のあけぼの展

12月７日(土)～平成26年１月31日(金)　場所：企画展示室　観覧料：400円(常設展含)

高知県出身の自由民権の志士たち、坂崎紫瀾、植木枝盛、宮崎夢柳らは、外国文学の翻訳や口語詩の試みを行い、日本の近代文学に大きな影響を及ぼしました。
三人を中心に、近代文学のあけぼのと高知の人々との関わりをご紹介します。

（※12月27日～１月１日は年末年始のため休館となります。）

©JET

平成26年2月～4月　黒井健 絵本原画の世界 ～物語との出会い～

平成26年２月15日(土)～４月13日(日)　場所：企画展示室　観覧料：500円(常設展含)

2012年に画業40年を迎えたイラストレーターの黒井健は、新美南吉の代表作である『ごんぎつね』をはじめ200冊以上の絵本や画集を出版し、その繊細なタッチは作品世界に深みをもたらします。黒井健の原画の世界を多彩な文学とともにご紹介します。

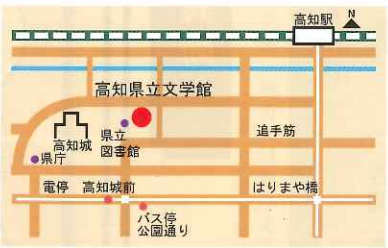
『ごんぎつね』偕成社
© Ken Kuroi/KEN OFFICE,1986

利用案内

開館時間	午前９時～午後５時（入館は、午後４時半まで）
休館日	年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料	一般350円　企画展はそれぞれ異なります。 20人以上の団体は２割引。高校生以下無料、 高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者１名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス〈県庁前行〉「公園通り」下車　北へ徒歩５分
- JR高知駅下車徒歩20分（またはバス・路面電車を利用）
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩５分
- バス停公園通り下車北へ徒歩５分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内１丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857